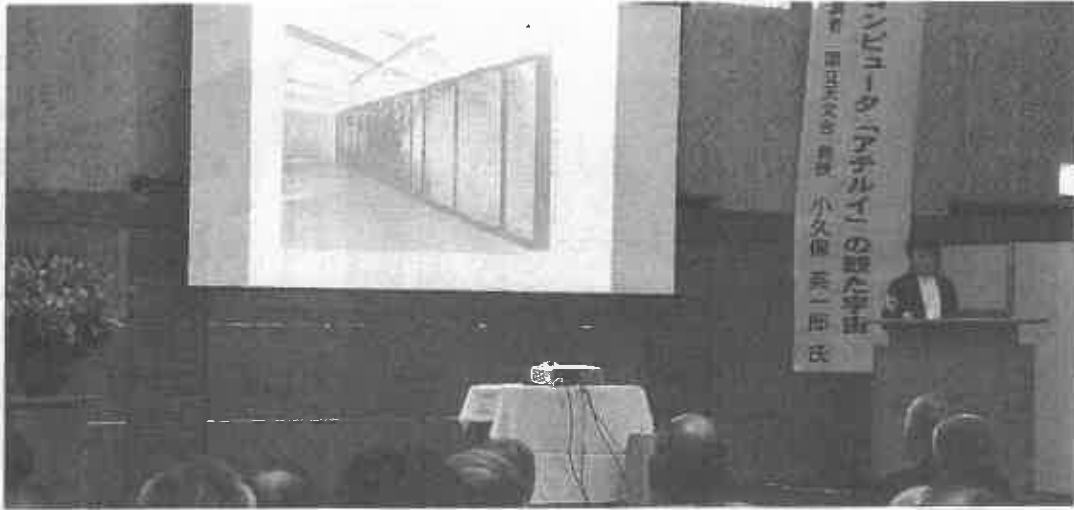


科学教育拠点10周年

奥州宇宙遊学館



10周年記念講演会で「アテルイ」について説明する小久保英一郎教授

関係者、発展誓い合う

奥州市水沢星ガ丘町の奥州宇宙遊学館（中東重雄館長）は開館10周年を迎え、記念講演会が21日、同市水沢倉河のプラザイン水沢で開かれた。旧緯度観測所本館の保存を求める市民運動を発端に歴史ある建物を改修して生まれ、幅広い世代が宇宙に親しむ場として歩んできた。子どもを対象としたサイエンスカフェなどに力を入れてきた関係者らは、地域の科学教育の拠点としてさらなる発展を誓い合った。

観測研究の成果講演も

記念講演は国立天文台の小久保英一郎教授が、同市水沢星ガ丘町の水沢VLB I観測所のスーパーコンピュータ「アテルイ」の概要や研究成果を紹介。「物理法則を使った天体シミュレーションにより、望遠鏡では見えない宇宙が見えてくる」と解説した。記念式典も行い、小沢昌記市長が歴代館長らに感謝状を手渡した。

旧緯度観測所は1899

賢治がたびたび訪れたという史実などを鑑みて保存を求める住民運動が拡大。07年に国から市へ譲渡され、耐震改修工事などを経て新たな施設に生まれ変わった。来館者は開館当時（08年度）の約1万3千人から年々増え、17年度は約1万9千人。実験教室や天体観測など活発なイベント開催で地元住民のリピーターが増えたほか、県外での認知度も高まっている。同館を指定管理するNPO法人イーハトーブ宇宙実践センターの大江昌嗣理事長は「地域一体となってここまで来られた。宇宙をもっと勉強したい、ILCに興味があるという地元子どもたちの声がうれしい。さらに10年、20年と続けていきたい」と決意を新たにしている。

（明治32）年に開所。初代所長の木村栄博士が地球の自転研究で「Z項」を発見し、世界に注目された。建物が老朽化し2005年に取り壊しが決まっていたが、建築の貴重さや宮沢